

アレクサンドル・バリーサヴィチ・スピヴァコーフスキイ
色丹島のオホーツク文化の貝塚（千島列島の民族史上の諸問題によせて）
Спеваковский, Александр Борисович.

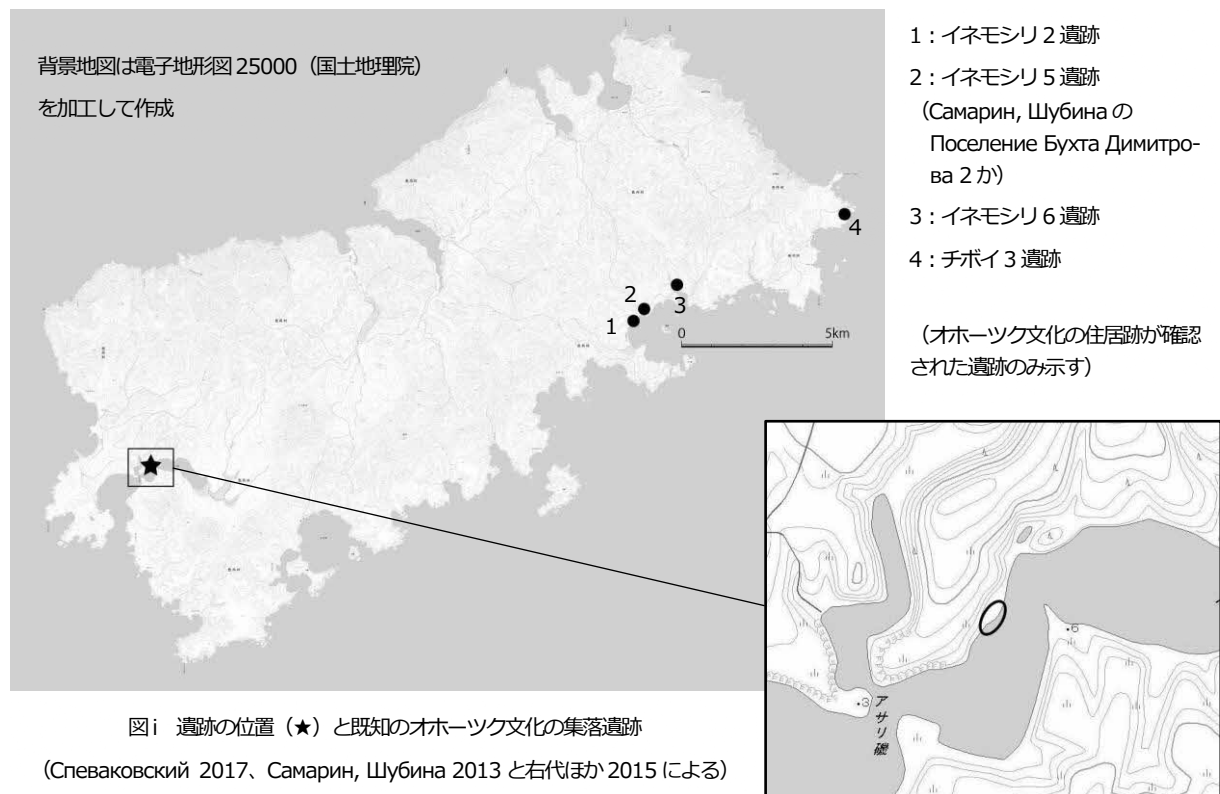
Раковинная куча охотской культуры на острове Шикотан (к проблемам этнической истории Курильских островов).
『小樽商科大学人文研究』第87輯 小樽商科大学 1994年 143~165 ページ

解題

1985年と87年の夏、ソヴィエト連邦科学アカデミー民族誌学研究所レニングラード支部の調査隊が色丹島でオホーツク文化の集落跡・墳墓遺跡を調査した経緯については、同じ著者による1997年の論文の訳文に付した「解題」に述べた。その成果は複数の論文の形で発表され（Спеваковский 1989 など）、またいくつかの学会会で報告されたほか、1990年には上記研究所支所の論集『アイヌ問題』に収めるべく調査の全体像を記述した原稿が用意され、ナウカ出版社での組版に入った。しかしその後ソ連邦の解体と経済的な混乱があり、刊行作業は中断した。

その後スピヴァコーフスキイ博士は極東に移り、論集の刊行を待ったが実現しないまま5年以上の歳月が過ぎた。その間、博士は1993年10月29~31日に小樽で開催された小樽商科大学国際先住民年記念講演会「北方先住民の過去と現在」でゼリフィン湾の遺跡の調査成果を紹介し、翌年にはその講演用の原稿を小樽商大の『人文研究』に発表した。ここに翻訳したのはこの講演原稿であり、その内容は当時小樽商大に勤務されていた匹田剛先生の翻訳による講演録（スピヴァコーフスキイ1994）と変わるところはないが、講演録では2~6号墓の個別の説明は省かれていることもあり、今回改めて訳出することとした。この講演原稿は、2017年にウラジオストクで論集『アイヌ問題』の刊行がようやく実現するまでの間、公表された範囲ではゼリフィン湾の遺跡の調査に関する最も詳しい記載だったのである。そして論集に収められた論文（Спеваковский 2017）とこの講演原稿の間にほとんど本文の差はなく、後者ではいくつかの挿図（遺跡の所在を示す地図、発掘作業風景と2・6号墓の写真）が省かれた一方、住居跡出土の石鎌と貝層出土の土器片の写真が追加され、さらに「スプーン」の写真が差替えられている程度である。

この遺跡の正確な所在地は、21世紀に入ってからロシア側の分布調査で再確認できず（Самарин, Шубина 2013 の123ページ）、北海道開拓記念館（当時）による2011~2014年度の学術交流を通じた色丹島の踏査（右代ほか 2015）でも不明であったが、『アイヌ問題』所収の論文の地図により、ノトロ湾の最奥部からさらに入り込んだ、ノトロ湖の北岸に臨む低い段丘、



ないし浜堤であることが明らかとなった(図i)。地名は色丹郡斜古丹村字ノトロ、遺跡を通過する道路は1927年に島の行政的な中心であったシャコタンとノトロを結ぶ村道として設けられたもの(田中・大野1940)の名残と考えられる。

スピヴァコフスキー博士には翻訳と発表の許可をいただいたうえ訳者からの度重なる質問にお答えいただき、さらに原本挿図の版下となった紙焼き写真をお貸りして鮮明な挿図を準備できたことを深く謝申し上げる。挿図はA5判の原本をA4判に組み直すにあたり面積2倍に拡大した。また、小樽商科大学人文学会からは刊行物の記事転載を御了解いただき、道立図書館には原本挿図の複写について協力いただいた。さらにサハリン州立郷土誌博物館のO.A. Шубина氏には解題の作成に際し多くの助言をいただいた。いずれも記して感謝申し上げます。

右代啓視・鈴木琢也・藪中剛司・高橋勇人・村上孝一・V.M.スコヴァティツィーナ 2015「北方四島の先史文化研究と博物館交流の基礎づくり(V)」『北海道開拓記念館研究紀要』43 37-66 ページ

A.B.スピヴァコフスキー(匹田剛訳) 1994「色丹島のオホーツク文化遺跡及びアイヌ民族とオホーツク人の民族の歴史に関する諸問題」『言語センター広報 Language Studies』第2号 小樽商科大学言語センター 89-95 ページ

田中薫・大野笑 1940「色丹島概説」大野編『南千島色丹島誌』アチックミュージアム彙報第47 アチックミュージアム 1-16 ページ

Самарин, И.А., Шубина, О.А., 2013. Памятники истории и культуры Южно-Курильского района. Южно-Сахалинск: Сахалинский областной Краеведческий музей.

Спеваковский, А.Б., 1989. Древнее погребение на о. Шикотан и проблема этногенеза айнов. Советская этнография, No. 5. сс. 50-63.

Спеваковский, А.Б., 2017. Исследование памятника охотской культуры на острове Шикотан и проблемы этнической истории айнов и охотцев. Тот же (ред.). Айнская проблема (вопросы этногенеза и этнической истории айнов). СПб: Музей антропологии и этнографии им. Петра Великого (Кунсткамера) РАН, Владивосток: изд-во Рубеж, сс. 195-214.

アイヌ民族の形成史に関する多くの問題の中でも特別な位置を占めているのはアイヌとオホーツク文化の担い手との間の関係であるが、この文化自体が地元の新石器文化と外来住民の文化的な諸伝統との統合の産物であった。この文化の出現の条件となったのは、キリスト紀元の頃、北アジアの大陸の諸地域から極東の島嶼地域に向けて新たに民族を異にする住民が押し寄せたことである。太平洋海域北部の島々への大陸からの移住は、現在の日本人の祖先が朝鮮半島を経由して列島の南西部に一団となって侵入したのと大筋において同じ時期のことであり、そしてこの移住は恐らく、アジア大陸内部における同じ一連の人口動態と諸民族の動向に起因するものであった。原住民のアイヌ系住民と大陸系の共同体に属する人々との接触は相当の長期間にわたり、複雑な性格を帯びたものであったとともに、その後アイヌ民族のうちに地域的な集団が複数形成され発展することに影響を与えた。

オホーツク文化は前1千年紀の末から後2千年紀にかけてサハリン、北海道北部及び千島列島に拡散した。オホーツク文化の形成はサハリンで始まり、ここでは紀元前1千年紀にさかのぼるその最も早期の遺跡が発見されている(ヴァシーリイフスキー・ゴールピフ1976)。北海道と千島ではより新しい遺跡が発見された。ある研究によると北海道での年代は概ね3-12世紀(エイケンス・樋口1982)、また他の研究結果では5-13世紀(シンポジウムオホーツク文化1982)とされている。オホーツク文化は基本的に沿海性の生活様式—沿岸の浅い海での海獣の狩猟、漁撈及び採集を志向したものである。

オホーツク文化の担い手とアイヌの祖先は大きく見て同一の社会経済的發展水準にあった。民族の違いに起因して彼らの間に衝突が起きたこともあったかもしれないが、全体としてオホーツク人とアイヌの祖先の関係は二つの文化が共存し相互に影響を与えるという性格のものであった。それを示すものは、オホーツク文化に平行して同じ地域で後1千年紀に擦文文化が発展していたことであり、後者は研究者が古代アイヌの共同体と直接の関係にあるものと見なしているものである。あるいはまさにこれが理由で、オホーツク文化の一部にアイヌの先祖の文化である縄文文化と類似したものが見られるのかもしれない。これら複数の伝統の間で多くの文化要素はほとんど共通している。恐らくアイヌの祖先からオホーツク人は土器製作を取り入れ、この伝統に固有の特徴を付け加えたのである(藤本1966、大井1973、前田1982など)。それと同時に、形質人類学的な特徴に関してオホーツク人はアイヌ系の住民とははっきり異なっており、大陸のモンゴロイドへの接近を示している。このことに関連してアイヌの民族形成史上の大きな課題の一つとなるのが、アイヌの先祖と接触を持つこととなったオホーツク文化の担い手の人種的・民族的な帰属を決定することである。しかしこの問題が非常に複雑なのは、今日なおオホーツク文化の中の地域的変異のそれぞれについて同程度に研究が進んでいるわけではないことによる。オホーツク文化



図1 色丹島の海獣狩猟・漁撈民の遺跡の全景

の古人類学的・古民族誌学的資料の主要な部分は日本の北部の遺跡での発掘で得られたものであり、またもっともよく研究されているのは考古学分野であって隣接領域についてはさほどでもない。ロシア極東の範囲ではオホーツク文化の多くの遺跡の研究が未着手、あるいは不十分である。収集された古人類学的資料はあまりに少ない。このことが支障となってオホーツク文化の担い手の形質人類学的構成、オホーツク人の複数の文化伝統の分布と発展について全体像を示すことは難しい。また研究を困難にしているのは2つの民族共同体がともに文字記録を残していないことである。

オホーツク文化が1000年以上にわたって存続したからと言って、その担い手が歴史の各時点を通じて民族的な観点から単一の種族であったと決めてかかることはできない。多分、変化しなかったものは古代アイヌ系の基盤だけであり、それは時の経過とともに大陸から到来した異民族系の住民集団に対して吸収的・文化同化的な作用を及ぼしたであろう。例えばサハリンの前1千年紀末のオホーツク人と北海道北部の後2千年紀はじめのオホーツク人を同じものとすることはできない、ということは恐らく間違いない。こうした観点に立って（個別の文化要素には幾分の類似が認められるとしても）十分な量の古民族誌学的・古人類学的な情報が欠けている現状では二つの地域の、年代上も異なる住民を同一の名称のもとにまとめることは、正当なものとは言えないのではなかろうか。多分、我々が取り扱っているのはオホーツク系の一連の文化群であり、その住民が民族上単系的であるというのは単なる仮定である。

オホーツク文化の担い手の人種・民族的帰属如何の問題のほかにも解決を要する問題が存在する。特に明確でないのは、オホーツク人が極東の島嶼領域のそれぞれに到来した経路である。そのためには個別の遺跡の年代が確認され確定され、それに応じて文化全体の年代学が確立されなければならない。

上述の点に関連して千島列島の南部では、オホーツク文化の分布域においてオホーツク人の頭蓋骨と古民族誌学的資料の収集を目的とした調査を実施することが決まった。

調査を組織したのはソヴィエト科学アカデミー民族誌学研究所レニングラード分所（現在のロシア科学アカデミー所属学術研究所「人類学民族誌学博物館」）であり、調査は色丹島で始まり1985年から87年までの期間に実施された。1985年の島の南西部の踏査の過程で「イルカ」湾に面して、オホーツク文化に属する古代の採集・漁撈・海獣狩猟民の長期にわたる滞在地が発見された。この遺跡の踏査とそれに続く調査の結果数多くの多様なデータがもたらされ、この場所に生きた北太平洋海域島嶼部における古代の狩猟採集民の生活様式の特徴、生業の実際及び物質・精神文化を再現することができた。古民族誌学上のものと並んで特別な意義を持つのは発掘に際して古人類学的な資料が発見されたことである。実質的に、この発掘資料は千島列島におけるはじめての古代頭蓋骨資料であり、この遺跡の学術上の基本的な価値もこの点にある。

遺跡は外洋から約2km離れた丘の麓の、海岸が張り出した地点の比較的平坦な土地にある。ここは付近の地形と湾の地勢によって外洋からの風と津波の直接の影響から守られている（図1）。

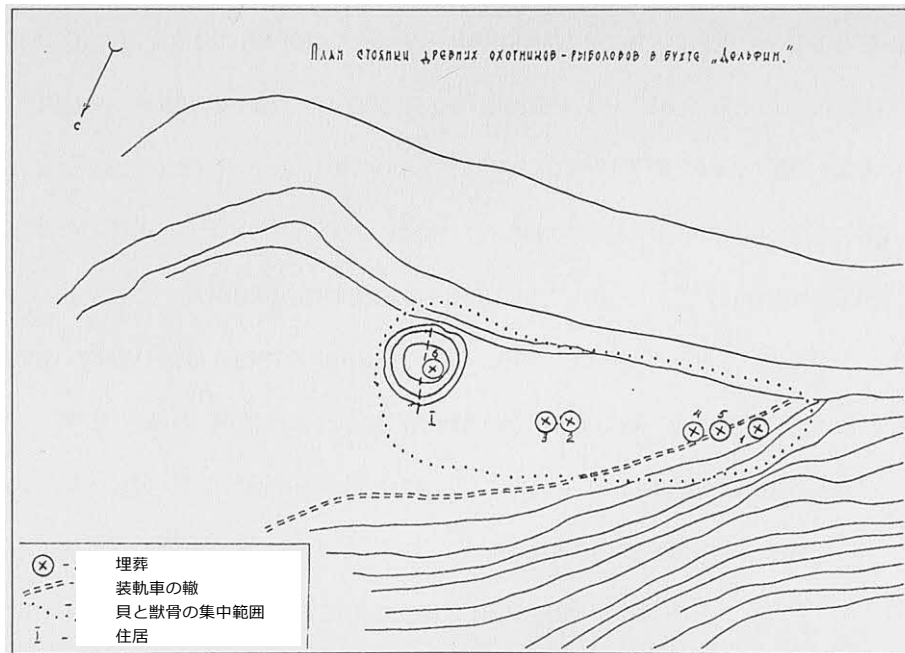


図2 遺跡と古人類学的な発見位置の模式図

この湾に多数ある石の多い砂浜は海獣たちの好む場所であり、そのうち一部の種類（ワモンアザラシ）は今日もこの島で見られる。湾の水域は夏の終わりから秋に産卵にやって来るサケ科の魚類に富む。遺跡のすぐそばには深い森があり、遺跡の住民はここで森の獣や鳥を狩り、採集活動も行ったことであろう。海産食料の採集はこの湾内でも、岸に沿った干潟でも可能であり、昆布、蟹、ウニ、貝などが採れた。付近にはまた飲用可能な水の泉が複数ある。

このような条件はこの地域に人間が適応し、少人数の地域集団が住みつくうえで好適であった。これらの条件が様々な活動の形態を組み合わせた複雑な獲得経済を実行することを可能にし、一年を通じて集団の存在を保障したのであった。

狩猟・漁撈及び採集の対象が豊かで遺跡の位置が有利であった結果、この場所での人の居住は長期間続いた。また重要であったのは、獣・魚及び貝の量は長期間にわたって比較的变化のない水準に保たれたらしいことである。これに対応して人口動態も全体として変化がなかった、つまり歴史的に展望しても地域集団の人数は、恐らく変動が少なかつたに違いない。湾の住民の数が増えれば必ずこの領域の食料資源に反映されたはずである。

遺跡は複合的で、直径7mほど、深さ約2mの円形の住居跡と思われる窪みと、長さ約40m、幅15mほどの貝塚（つまり食料残渣の捨て場）から成り、厚さの一定しない貝、海獣・陸獣の骨、鳥、魚、ウニなどの骨の層（厚さ30cmから住居の付近では2.5mに達する）が伴っている。

住居跡の窪みの大きさから判断して、ここには単一の家族（組織）が住んでいて、狩猟・漁労に関する土地の用益権を自分たちだけで行使していたのだろう。

デリフィン湾の遺跡に関する年代のうち最も古いもの（動物の骨による）は2,510±20年（Jc-4029a）と測定された¹⁾。分析用の資料は多くの中から抽出されたものなので、今後より古い年代測定値が得られる可能性も排除できない。そのうえ、遺跡の複数の文化層で古代アイヌ系の縄文文化の土器片が発見されており、これは年代的にオホーツク文化に先行するものである。木炭試料の分析ではこれとは別の、もっと新しい放射性炭素年代が得られた。中でも、木炭試料による年代のうちの一つは現代に最も近く、絶対年代では930±40年（Jc-3011）となっている。このようにして、この遺跡の場所には、中断を挟みつつあるかもしれないが、それでも少なくとも1,500年の長きにわたって人が住んでおり、もし最も表層から採取した、現代に最も近い年代を示した木炭試料を考慮に入れるならその居住期間は2,500年このかたに及ぶことになる。

1985年の踏査と1987年の調査でこの遺跡では6つの墳墓が発見され、そのうち3基が男性、1基が女性、2基は子供の墓であった（図2参照）。

最も興味深いのは、1985年の調査旅行で最初に発見された古人類学的資料、つまり2,280±20年前の年代（Jc-4029b）が与えられた男性の遺骨である。この頭蓋と骨格は、その後発見された遺骨とは異なって、少しばかり外部の環境の影響を被っていた。骨格はほぼ完全に保存されていたが、頭蓋だけは左の頭頂骨と頬骨に破損が生じ、鼻骨は欠如しており、死後の頭蓋の変形が幾らか認められる。

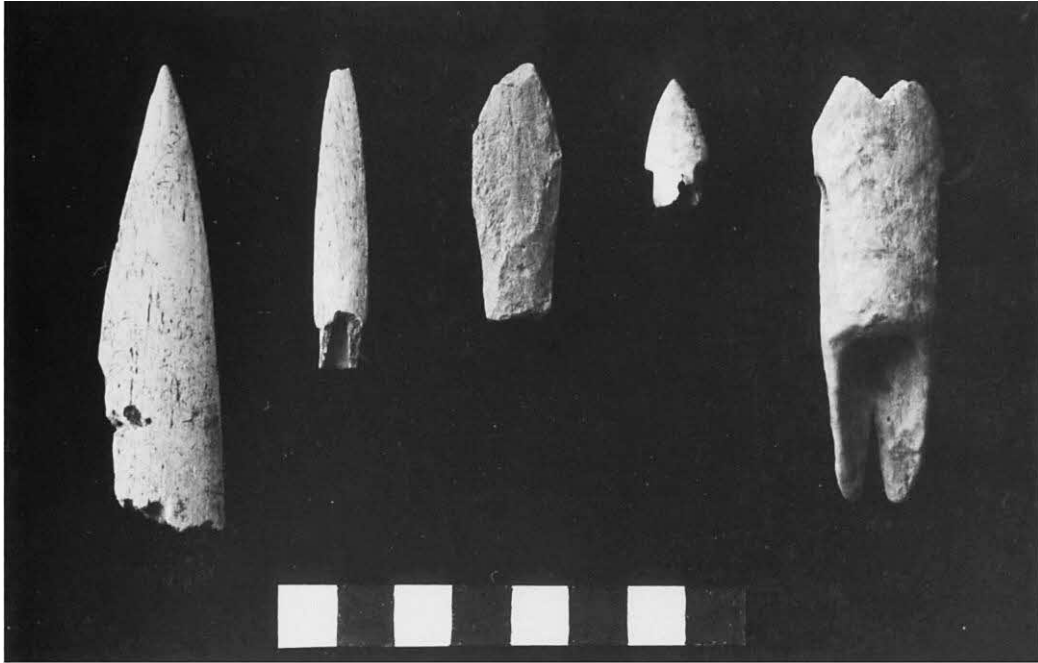


図3 1号墳墓出土の骨角器（回転式離鉾、骨槍及び骨鏃）

この被葬者は貝塚の区域に位置しており、貝塚の南西部の、厚さ 20cm の腐植土の下にあって、上から数個の大きく扁平な石（直径 30 から 45cm）が胸郭の部分を中心にして置かれていた。骨格の埋葬位置は浅く（地表から約 40cm）、貝層の中に墓穴の痕跡はなく、解剖学的序列を保っていた。遺体は 40 歳前後の男性のもので、頭を北に向け仰向けに横たわっていた。脚は胸郭の方に引き付けられ、腕は肘から折り曲げられていた。副葬品の中には土器が 3 点あり、2 点は小さいがもう 1 点は大きく、頭蓋を覆うのに使われ、多分貝塚の中の被葬者に土を掛ける際に貝殻がその顔に当たらないようにするものであったろう。大型の土器と小型の 1 点とは細い貼り付けによる装飾を持つ（オホーツク文化に属するこの型式の土器は日本の考古学文献の中では「ソーメン文」、つまり細い種類の装飾、として指標的な扱いを受けている）²⁾。もう 1 点の無文の土器の中には魚の骨が幾つか見られた。多分、魚の汁があの世での食物として死者に捧げられたのであろう。頭蓋のすぐ傍らには鳥類の管状の骨で作った鏃が 2 点あった。精査を行った方格（2×2m）の範囲の中の埋葬から少し離れたところで、貝層の中から犬の下顎と頭骨、それに骨製品が出土した。海獣狩猟の用具、つまり銛が複数、その中の 1 つは回転式であり、また鏃、及び用途不明のシャベル状の製品である（図 3 参照）。これらの遺物が副葬品の一部であったか、それとも遺体を埋めた貝混じりの土に含まれていたものであるのかは答えることが難しい。

その他の 5 体の骨格は 1987 年の野外調査の際に発見された。それらは先に発見された骨格と同じく、概ねキリスト紀元頃のものと考えられる。

2 号墳墓では 25~30cm の深さのところ男性が葬られていた。骨格は右の脇を下にして腕は肘から折り曲げ脚は胸郭の方に引き付けた状態で解剖学的な位置関係を保ち、頭部は顔面を上に向けていた。骨格は北に向けられかなり大きな石が複数（長さ 30 から 60cm、幅 20 から 40cm）周りに並べられていた。大腿骨（上方 3 分の 1）、脛骨（下方 3 分の 1）及び骨盤は石の下にあった。遺骸は貝殻で覆われていた。頭骨は完全に破壊されており、20 個以上の頭骨の破片となっていた。下顎は 2 つに割れていた。歯は残っていた。

副葬品としては鉄の小刀と骨製の道具各 1 点がある。

3 号墳墓は女性かと思われた。2 号埋葬から 1.5m のところに位置している。遺骸は地表下 25~30cm の深さにあり、二枚貝の貝殻で覆われていた。遺体の解剖学的序列は乱れ、第一頸椎は頭蓋から 40cm 離れたところにあった。四肢骨のうち大腿骨、脛骨、上腕骨が認められ、また肋骨、指骨が幾つかと椎骨 1 点が残っていた。その他の骨は、下顎も含めて欠落している。骨が埋葬の南側に集中して残っていたことから考えて、遺骸は当初、恐らくは北を向いていたのであろう（図 4 参照）。頭骨の保存状態は思わしくなく、顔面は完全に破損していた。にもかかわらず頭蓋は（左の顱頂骨を除いて）ほぼ完全に残っていた。

副葬品としては鉄製の小刀（写真中央）と針があった（図 5）。



図4 女性を埋葬した3号墳墓



図5 3号墳墓の副葬品（鉄製小刀、錐）



図6 4号墳墓の副葬品（骨製品）

4号墳墓は子供のもので、地表面から10~15cmの深さにあった。埋葬状態の精査中に確認されたのは頭骨だけで、その他の骨格は欠如している。頭骨の位置から判断して、遺体は北頭位であったとみられる。礫と大形の海獣の骨を被せ、貝殻で覆われていた。頭骨の保存状態は思わしくない。頭骨は装軌車の轍の直下にあったために粉々になっていた。下顎は3つの断片になっていたが、歯は何本か残っていた。

副葬品は円形で中央に穿孔のある骨製円盤2点、骨製の針入れ(?)と黒曜石製の石鏃である(図6)。頭骨の付近には土器片と炭が認められた。

5号墳墓は4号と同様子供のもの(年齢は4~5歳ぐらい)で、4号墳墓から2.5mのところで見つかった。幼児の遺骸は地表から10~15cmのところがあり、北西方向に向けられていた。遺骸は解剖学的の順序を保ち、大形の海獣の骨の上に仰向けに



図7 6号墳墓の土器



図8 6号墳墓の祭祀遺物（「スプーン」）

横たわっていた。遺骨のうち欠如している部分も多かったが、被葬者はひじを折り曲げ脚を胸郭のほうに引き寄せた姿勢であったと考えられる。骨盤と四肢骨の位置、及び頭骨の付近で発見された指骨がこのことを示している。遺骨は礫を被せられ貝殻と魚骨で覆われていた。

遺骸の保存状態は思わしくないが、これは遺骸が直接土に接していた結果である。頭骨は完全に破壊され、下顎は破片になってしまっていた。下顎の歯が数個、また骨盤と四肢の骨が残っていた。

頭骨の近くに細い貼付紋のある土器片（副葬品かもしれない）と用途不明の骨器がみとめられた。墓葬の下部には黒曜石製の石鏃が1点発見された。その付近で炭化物試料の採取を行った。

竪穴（住居跡）の中央で男性を葬った6号墳墓が発見された。遺骸の解剖学的序列は乱れている。下顎と第一頸椎は頭骨から20cm離れて出土した。墓の中では大腿骨、脛骨、上腕骨（上腕骨の下方3分の1は折損している）など四肢の骨と肋骨の破片が見つかった。骨盤と脊椎は欠如している。頭骨のそばには歯もあったが、およそ1平方メートルの範囲にばら撒かれた状態であった。

遺骸は中程度の大きさの礫数個と大形海獣の骨（鯨類の肩甲骨を含む）を被せられ、ホタテガイとイガイの貝殻で覆われていた。遺骸は頭を北側にして横たわっていた。



図9 住居内で発見された石鏃

頭骨の保存状態は満足できるものではなく、顔の部分は損なわれている。頭蓋も破損し4つの大きな破片になっていた。埋葬から少し離れたところに骨製の回転式銚頭の体部と、用途不明の骨器、土器(図7参照)、黒曜石製の石鏃が1点、さらにスプーンに似た遺物が見つかったが、これはどう見ても祭祀用のもので、恐らく副葬品の一部であると思われる(図8参照)。「スプーン」の表側は骨を素材に巧みに彫刻され、キツネ(またはタヌキ)が水中からアザラシの子を引っ張り出している姿が立体像で表されている。この遺物はこの地域共同体の住民がすばらしく発達した芸術的なセンスを持っていたことを示しているとともに、間違いなく古代芸術上の逸品である。

この種の遺物は以前にも千島列島の貝塚調査に際して発見されたことがある。日本の研究者たちの意見によればこうした骨製の「スプーン」はアイヌの「イクニシ」、つまり「カムイノミ」あるいは精霊を祭る際に用いられる祭祀用具のように使われたであろうという。

住居の北側には、遺骸から4mの距離のところに石鏃製作のための「工房」が見られた。やや長手の石が一つ住居の床に据えられ、その周りに押圧剥離技法で製作された石鏃が16点集中していた(図9)。

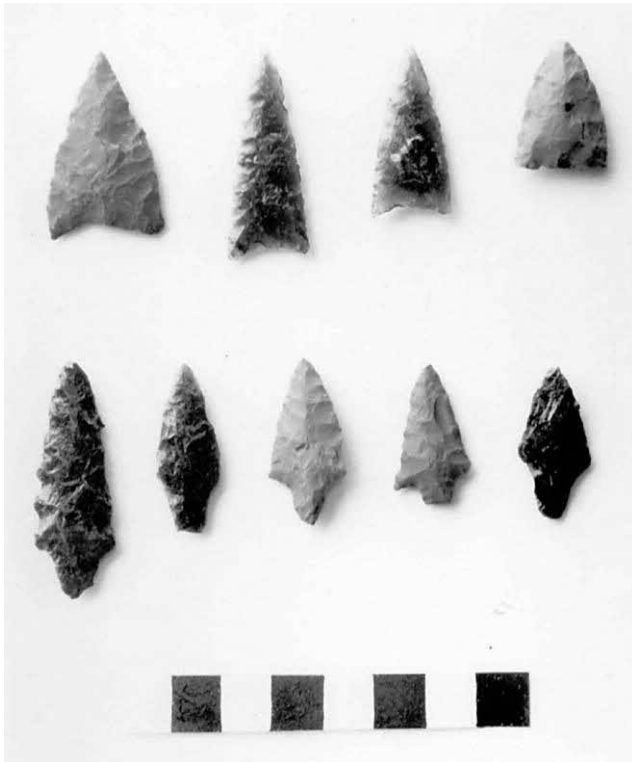


図10 貝塚の精査の際発見された石鏃

遺跡の貝層で発見された動物遺体には海獣と陸生動物があった。特に多くの、主に大型動物の骨が埋葬の周囲で確認され、それが被葬者に被せられていた。埋葬群から離れた側では骨の量は減少し、土器片の量が多くなる。貝塚の中央部で調査隊員たちは小型のクジラの脊柱を発見した。椎骨は解剖学的な序列を保ち、人間の遺体に対する扱いと同様に、かなり大きな礫を複数被せられているらしかった。このクジラのものと思しき頭骨と下顎は別の場所、つまり住居の中の南側の海に近い側で、ほとんど厚さ1m半に達するイガイとホタテガイの層の下にあった。クジラの頭骨は意図的に(?)北に向けてあった。1号埋葬のすぐ傍らの貝で覆われた中に大形の鰭脚類の骨が発見された。住居の中の南西側では貝層の中でトドの頭骨、小さいクマの頭骨と大形のクマの下顎が得られた。またこの遺跡では、恐らくアイヌたちの場合そうであったように食料として利用した可能性のあるイヌの頭骨も幾つか発見され、キツネの頭骨、ウサギの骨や多量の各種の鳥類の骨も見られた。

このように、海獣及び陸生動物の骨から判断して、この遺跡の住民は沿海性の生活様式をもち、海獣狩猟に力を入れていたが、季節的に海での狩猟の閑散期には山林



図 11 貝塚で発見された土器の例

の動物や鳥類の狩猟にも従事していた。海獣狩猟の証拠となるものは男性の埋葬の傍らで発見された回転式の銚であり、これは古来（概ね前5千年紀には出現していた）北海道周辺に広く分布していたものである。また多数の石鏃（図10）や骨製の鏃（鳥類の管状の骨で製作し中空のもの）も狩猟を物語っている。クジラ類と鱈脚類の狩猟は、恐らくアイヌの場合のように舷側板を付け加えた丸木舟に乗って島の南西部の海と入江で行われたものであろう。狩猟には銚を用いたばかりでなく、恐らくは色丹島を含む千島列島に複数の種が成育するトリカブト類の毒を塗りつけた矢を用いた場合もあったであろう。

季節的な生業のサイクルには漁撈が組み込まれていた。サケマス類が大群を成して遡上する時期には網漁が行われたと推量するが、これを裏付けるのは紐を結ぶために敲打による溝をつけた大きな石錘であり、恐らくはイラクサの繊維で燃った紐が使われたのであろう。

沿岸の浅瀬で食料を採集する作業は、アイヌの民族誌からの類推で言えば主に女性の仕事であったが、昆布の採集やホタテガイ漁には男性も参加した。遺跡の住民たちの食料の中で最も大きな地位を占めていたのはイガイ類の貝であった。貝塚の大部分はこの貝の貝殻である。また住居の周囲では特に、ホタテガイやその他の貝類も多い。住居の窪みの脇のホタテガイとイガイの貝層は2mから2.5mの厚さに達している。ホタテ貝殻の層とイガイのそれは交互に現れる。恐らく、これは季節によって異なる種類の貝を採集したことによるのである。

土器片の数が多く、遺跡の文化層にぎっしり詰まっている状況は、入江の住民たちが発達した土器製作の伝統を持ち、また土器を多量に製作して日常生活に用いていたことを物語っている。圧倒的多数の土器はオホーツク文化の土器に類する、あるいはそれと同等しうるものである（図11・12参照）。それとともに、すでに述べたとおりこの遺跡では縄文系の土器片



図 12 貝塚で発見された土器の例

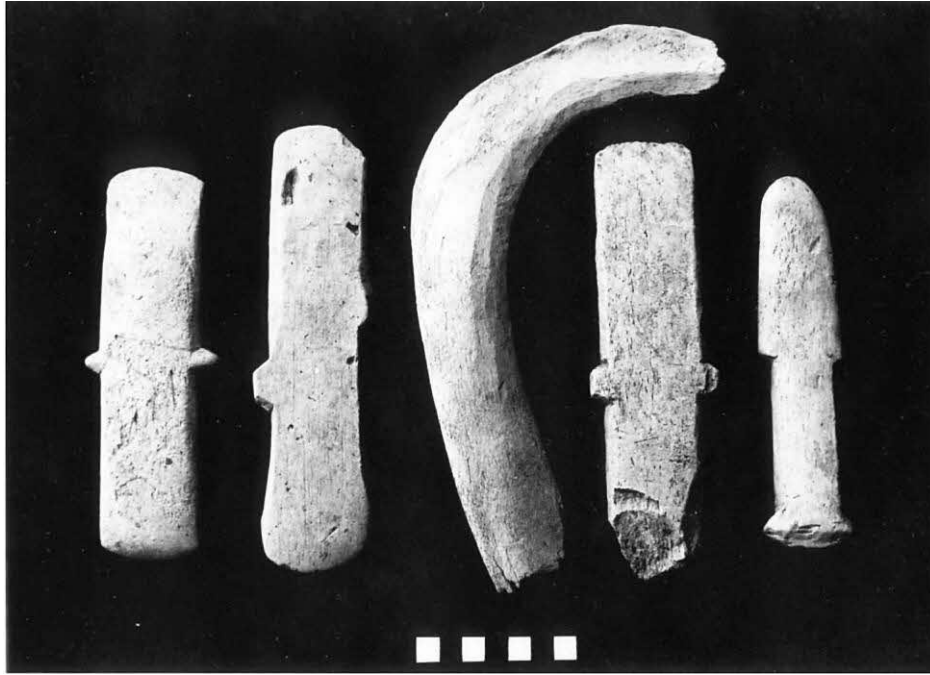


図13 貝塚の精査の際発見された骨器

も確認されている。

貝塚の中からはさまざまな骨器が発見されたが、これは大型動物の柱状の骨の厚い骨質部分を材料としたものである（図13）。どのように呼ぶべきものかは全く不明である。この道具はどうやら住生活に用いられ、複数の機能を持つものであったらしい。土器の製作に用いられた可能性もある。

このように、収集されたデータが物語るのはギリフィン湾の遺跡はその基本的な指標（文化要素、生業活動の特性等）に関して確実にオホーツク文化集団のものであった、ということである。

文化層中には（2・3号墳墓の副葬品の一部として）鉄製品が存在し、湾の住民が極東地域のより発展した社会との接触を持っていたことを物語る。こうした関係が間接的には沿海州や満州との間で維持されていた可能性もある。島嶼住民の間では金属器は恐らく（物々交換による）交易品であった。遺跡で出土した石鏃の大多数は黒曜石製である。貝層の中に黒曜石の剥片が見られることからこの遺跡で石器製作が行われたことは確かである。しかし色丹島では黒曜石は搬入品であり、これも交易を物語るものと言い得る。

住居の規模からは社会組織の詳細を何ほどか、例えばこの土地の狩猟・漁撈組織の人数を大まかにではあるが復元することができる。遺跡の住民たちはこの場所に住み、またここで死んでいった。成員の誰かが死んだあとこの居留地は放棄されたかも知れないが、一定の時間が過ぎるとこの住みやすい岬に帰ってきたことであろう。

この遺跡の集団が示す伝統の中にはアイヌの祖先からの影響を示すものが幾つかある。埋葬方法（貝塚への埋葬、屈葬姿勢、北方頭位、襁褓葬など）、副葬品、発掘を通じて出土した道具類などによってオホーツク人とアイヌの文化要素を比較することができる。

結論として、収集された資料の全体は、大まかにではあるが、この入江の古代住民の生業と生活の有様を再構成することを可能にするものと言える。

しかし色丹島のオホーツク文化の担い手たちがどのような種族・民族に帰属するかを決定することはそれほど容易でない。それが困難なのは何よりも、古人骨の頭骨資料が少なく保存状態もよくないことによる。貝塚で発見された6体の頭骨のうち多少なりとも満足のいく状態であったのは1号墳墓のものだけに過ぎない³⁾。すでに述べたように2体の遺骨は装軌車の轆によってほとんど完全に破壊されてしまっていた。またほかの2体は、被葬者が地表から浅い場所にあったため、おそらく動物による攪乱を受け、埋葬の中での解剖学的序列が乱れてしまっていた。

オホーツク人全体の形質人類学的な類型を結論することも同様に難しい。結論は頭骨研究のための資料体が、ある特定の地域集団の居住範囲と埋葬の年代にわたって揃うか、といった問題に左右される。

色丹島の古人類学資料に対し、極東の諸民族の分類の上で最も重要な頭骨の形的特徴の検討を含む予備的な分析が行わ

れ、オホーツク文化の他の頭骨（主に北海道大岬産出のオホーツク文化後期のもの）とも比較した結果、ある種矛盾した構図が示された。極東の諸民族の分類上最も重要な頭骨の形態的特徴における2つの指標（眼窩底パターンⅡの頻度及び後頬骨縫合の頻度）においてオホーツクの資料群の全体はアムール地方のツングース・満州系諸族の頭骨、特に現代のナナイ系諸族とウリチに近似する（山口1975、石田1988）。この近似を説明するのが、オホーツク文化の歴史的諸類型に関する考古学的研究に関する資料である。考古学的なデータは後1千年紀後半に靺鞨文化を携えた人々が島嶼地域へ浸透したことを示している。オホーツク人の舌下神経管二分の頻度は極東の古アジア諸族、つまりニヴフへの接近を示している（カズィンツェフ1990）。とは言え、現在の研究水準ではツングース・満州系諸族とニヴフがかつて相互に遺伝的な親縁関係にあったか否か、なお明らかでない。ニヴフとツングース・満州系諸族の間の類似はアムール下流地方における激しい混血の結果であるかも知れないのである。いずれにせよ、現在の頭骨研究に関して言えばニヴフの研究はデータが非常に少ないことが原因で不十分である。眼窩上孔の頻度からはオホーツク人とアイヌの近似が明白に示される⁴⁾。この形態的特徴以外に、歯学上の特徴からもアイヌとの混血はうかがわれる。歯式の特徴からみて色丹島の資料は北東アジアの住民（例えばチュクチ、アレウト、エスキモー）より縄文文化の集団の頭骨に近い⁵⁾。そしてエスキモー・アレウト集団との近似は頭骨形態の特徴においても確認されていない。

頭骨の形態学的特徴の研究結果は、このように、オホーツク人にはアムール系（ツングース・満州系）の成分が優勢であったもののアイヌ系の混血も加わっていた、という仮説に矛盾するものではない。

しかし、色丹島の古人骨資料と北海道北部の材料を分析する際に決して忘れてならないのは、色丹島の遺物は事実上ただ1つしかないということである。色丹島の頭骨はオホーツク人の頭骨全体の中で3%を占めるに過ぎず、全体的な議論には実質的に影響を及ぼすものではない。さらなる頭骨形態研究のための資料体とその研究が求められる。

大まかには、オホーツク文化の分布域における民族形成史の構図を次のように示すことができる。恐らく、この文化を形成した大陸の住民の島々への到来は幾つかの段階を追って生じたものである。ツングース語族の言語を持つ諸集団は新石器時代後期とそれに続く時代の初めにアムール流域に現れたのち（ヴァシリエヴィチ1969の258ページ参照）、沿海州の定住者たちを同化し、また一部は北方のオホーツク海沿岸へ、及び東、つまりはサハリン島に排除した。これらの共同体の先祖は今日の居住地よりはるかに南方に住んでおり、またチュクチ・カムチャツカ系の言語を話していた可能性がある。これらの言語はアムール下流地方のツングース・満州系の言語の中に伏在要素として保存されており、これについてはすでに述べた。一部の研究者はアムール下流域とサハリンの地名の中にニヴフ語以前の言語の伏在要素を認めている（クレイノーヴィチ1973の48-49ページ、『極東の諸民族』1985の50ページなど）。残念ながら、これがどのような集団であったか正確に決定することは、民族誌学及び隣接諸科学上の資料が極端に少ないため、今のところ非常に難しい。到来した諸集団はサハリンから北海道及び千島列島へと拡散し、そこで島々の原住民、つまりアイヌの祖先と接触した結果、地理的条件のもとで地域性の強いオホーツク文化の類型が幾つか形成されていったが、それらはアイヌの祖先の文化に近い特徴を持つものであった。

これに続くツングース・満州系諸集団の拡散が紀元後1千年紀から2千年紀はじめに極東と北東シベリアで起こり、一方では現在のチュクチ・カムチャツカ系住民の祖先をさらに北東へ追いやるとともに、他方ではおそらく、島嶼地域にも生来ツングース語を話す住民を到来せしめたであろう。その拡散の最後の一部として今から数世紀前にサハリンに到来したのがオラクとエヴェンキである。

数の上では少なかった大陸由来の諸集団は島々に到着したのち、より数の多い原住民との民族接触の過程で古アイヌの文化を受け入れ、それと同時にサハリン、千島及び北海道のアイヌの祖先の言語にツングース・満州系の要素をもたらした（まさにこの状況こそがアイヌ語の中にツングース・満州系の語彙に対応するものが存在する理由を説明するものとなるようである）、さらに島嶼部の原住民の形質人類学的類型に影響を与えた（サハリンのアイヌにより顕著である）。移住者たちがアイヌの祖先たちとの間で絶え間ない同化と文化変容を被った結果、オホーツク人たちはアイヌたちの間に溶け込み、実質的に今日まで独立した民族として残っていないのである。

注

1) ソ連科学アカデミー考古学研究所（現ロシア科学アカデミー物質文化研究所）レニングラード分所研究室のデータ。

2) しかしここで直ちに、「ソーメン文」の類型を示す1号埋葬の副葬土器は日本人学者の研究によれば、それが付随する遺骨よりずっと新し

い年代のものである、という点に矛盾が含まれていることに注意する必要がある。「ソーメン」文のある土器の年代について日本の考古学者は後1千年紀の中頃より遡ることはなく、むしろ1千年紀後半のものとしているのである。このことと関係して、遺体資料についての測定年代の追試と確定か、オホーツク文化遺跡の編年の再考が考えられてよい。

- 3) 1号埋葬の頭骨は現在ロシア科学アカデミーの人類学・民族誌学博物館の人類学部門に保管されている。
- 4) A.Γ.カズインツェフ（ロシア科学アカデミー人類学・民族誌学博物館）の談話による。
- 5) K.Γ.ターナー（アメリカ合衆国アリゾナ州立大学）の談話による。

文献

- 1、ヴァシリエヴィチΓ.M.。エヴェンキ 歴史・民族誌的概観（18世紀から20世紀初頭）。レニングラード、1969年。
 - 2、ヴァシーリエフスキイP.C.、ゴールピフB.A.。サハリンの古代集落（鈴谷遺跡）。ノヴォシビルスク、1976年。
 - 3、クレイノーヴィチE.A.。ニヴフ サハリンとアムールの謎の住民。モスクワ、1973年。
 - 4、17~20世紀のソ連邦極東の諸民族。モスクワ、1985年。
-
- 1、前田潮。オホーツク文化の展開と地域性。[大井晴男編] シンポジウム オホーツク文化の諸問題。東京、[学生社、] 1982年。
 - 2、大井晴男。オホーツク式土器について。[大場利夫・大井晴男編] オンコロマナイ貝塚。[東京大学出版会、] 1973年。
 - 3、シンポジウム オホーツク文化の諸問題。東京、1982年。
 - 4、藤本強。オホーツク土器について。考古学雑誌、第51巻第4号、1966年。
-
- 1、Aikens, C. Melvin, Higuchi, Takayasu. Prehistory of Japan, New York, London, Toronto, Sydney, San Francisco, 1982.
 - 2、Ishida, H. Morphological Studies of Okhotsk Crania from Omisaki, Hokkaido. Journal of the Anthropological Society of Nippon, vol. 91, No. 1, 1988.
 - 3、Kozintsev, A. Ainu, Japanese, their Ancestors and Neighbours: Cranioscopic Data. Journal of the Anthropological Society of Nippon, vol. 98, No. 3, 1990.
 - 4、Yamaguchi B. Cranial Features of the Okhotsk Culture People. Sea Mammal; Hunters: Origin of the Okhotsk Culture. Dorumen, No.6, 1975. [山口敏。オホーツク人の顔つき。加藤晋平、大塚和義、桜井清彦、山口敏。海獣狩猟民：オホーツク文化の源流。季刊どるめん、第6号、JICC 出版局。]